【論文】

ある日本語第二言語話者におけるジャンルの獲得

他者が語ること，他者と語ることを通して

大平幸*

概要

本研究は，日本に住む学習者のある特定の活動領域における実践への参加がどのようにして可能になっていくのか，またかれらが参加可能な領域をどのようにして広げていくのかをジャンルの獲得という観点から明らかにすることを目的とする。本稿では，特にそのようにして自らの生活の場を広げつつある協力者の特定の活動領域における実践への参加に注目し，その協力者の参加を可能にしているものについて明らかにする。

キーワード

ジャンル，バフチン，活動領域，移動，越境のための日本語

1. はじめに

グローバル化社会の到来を受け，近年国や地域を越えた人の移動とその状況を取り巻く問題が大きくとりあげられている。しかし，人はこれまでも，大なり小なり移動を繰り返す中で活動の範囲を変化させ日常生活を営んできた。たとえば，転居，進学，就職，結婚などもその契機としてあげられる。さらに言えば，新しくアルバイトをはじめ，そのアルバイト先での実践に一人のメンバーとして参加するようになったなどもその小さな移動に数えられるだろう。そしてその都度それまで慣れ親しんだ場所を離れ，異なる習慣を有する新たな場所での生活をはじめる。国境を越える大きな移動については，例えば異文化間コミュニケーションなどの問題として注目を集め焦点化される。しかし，通常このような小さな移動については，国境を越える大きな移動ほど大きな関心は払われず，見落とされる傾向にある。

では，日本に暮らす外国人は最初の大きな移動の後に続くそのような小さな移動にともなう困難をどのように経験し，習慣の異なる新たな生活の場において生活を営むことができるようになっていくのだろうか。また，どのようにしてその生活の範囲を広げていくのだろうか。

本研究では，日本に住む学習者のある特定の活動領域における実践への参加がどのようにして可能になっていくのか，またかれらが参加可能な領域をどのようにして広げていくのかをジャンルの獲得という観点から明らかにすることを目的とする。本稿では，特にそのようにして自らの生活の場を広げつつある協力者のある特定の活動領域（A 工業短期大学）に注目し，協力者の実践への参加がどのように可能になっているのか，またそのような参加を可能にしているものが何かについて明らかにする。

2. 先行研究

2. 1. 生活の言葉

これまで，日本語教育において学習者の生活に必要なことばは，主にヴァリエーション研究，専門日本語などの分野で扱われてきた。そこでの議論は主に教室で扱われるべき内容がどのようなものなのか，またそれらをどう教えるのかという点を中心としたものが主流であった。

* 韓国・大田大學校（ever_smile0907@yahoo.co.jp）

その後，国内で暮らす外国人の増加，多様化を受け，外国人の生活に必要なことばに対する関心はさらなる高まりをみせる。また，それにともない，生活に必要なことばを，教室ではなく生活の場から考えることの必要性が認識されるようになった。春原（2006）は，このような状況を受け，ビジネス関係者や留学生などある特殊な知識や専門性が必要な外国人に対する日本語教育であるとされてきた専門日本語について定義の捉えなおしを行っている。春原はここで専門日本語とは何事かをなすためのあるいは何者かになるための言語活動であり，またそのための教育とは将来のための準備をする場ではなく，〈今・ここ〉に生きる世界のさまざまな課題に対して，とくに言語問題の切り口から取り組む領域であると述べている。つまり，専門用語とは特殊な知識やそれを表現するためのことばではなく，一人ひとりの外国人が生活を営む上で必要なことばであり，当事者が生きる世界における課題をことばの面から解決していくことが重要であるとしているのである。また，さらに春原はその課題を解決するためには，具体的な文脈を持った現場から常に出発することが必要であると述べている。

2．2．越境のための日本語

学習者の生活に必要なことばについては，さらに2007年からはじまった文化庁委託事業を契機に，「生活者としての外国人」に対する日本語教育という観点からさまざまな議論が交わされるようになった。その中には，日本に住む外国人の生活を出発点とし，生活とことばの発達の関係について言及したものもある。菊岡，神吉（2010）は，就労現場における外国人就労者の言語発達を明らかにするため，外国人を含む就労現場における実際の言語活動を分析し，就労現場における言語発達の限界を指摘している。その限界とは，外国人就労者が自覚的な言語使用[1]が十分行えないため，ある特定の文脈においては大きな問題もなく言語活動に参加できても，異なる文脈におかれた場合には，その参加が困難になるというものである。実際に菊岡・神吉が観察を行った就労現場では，職場での通常の活動においては周囲からも有能であるとされていた外国人従業員が，文脈を共有しない他者に，その活動について説明を求められた際に，十分な説明ができないということが起こっていた。先に述べたように，これまでこのような文脈間の小さな移動と，その移動にともなう困難は見過ごされる傾向にあった。しかし，菊岡・神吉はこのような文脈間の移動に注目し，目に見えるかたちでこの問題を提示している。また，さらに外国人がそのような閉ざされた固有の文脈を越え，異なった文脈との自由な横断の実現を可能にし，外国人の社会参加を促すものとして「越境のための日本語」という概念を提示し，その重要性を主張している。

大平（2010）は，日本に住む学習者が自らの生活に必要なことばをどのようにして身につけているのかを知るため，ジャンルという概念を用いて分析を行い，活動領域における実践への参加とそれら複数の領域間の移動を通じた学習者のことばの発達の過程を記述した。このように複数の活動領域間の横断を可能にし，自らの生活の範囲を広げつつある学習者，つまり異なった文脈との行き来を可能にしている学習者の習得の過程を明らかにすることは，「越境のための日本語」の議論にも資するものであると考える。

大平（2010）の調査はインタビューによって行うことで，より学習者に近い視点から，その学習者のできごとへの意味づけも含めて習得の過程を示すことができた。しかし一方で生活場面においての観察が行われてないため，実際の生活においてどのようなことが起こっていたのかは明らかになっていない。したがって，本研究ではインタビューに加え，協力者が生活する場におけるフィールドワークによって，実際にその学習者がどのような場においてどのような活動に従事していたのか，またその参加のあり方がどのようなものであったかを含め観察を行う。

3．分析の枠組み

本研究では，分析の枠組みとして「ジャンル」（バフチン，1952-1953/1988）という概念を用いる。バフチンは，ジャンルを「人間のさまざまな活

1 菊岡，神吉（2010）では，話者によって自覚的に使用される言語を二次的ことばとし，二次的ことばの習得に伴う自覚性と随意性の発達が文脈間の横断を可能にするとしている。また，生活者としての外国人の越境を可能にするための市民教育の可能性が示されている。

動領域が創り上げる，発話の相対的に安定した諸タイプ」と定義し，多岐にわたる人間の活動のそれぞれの領域がことばのジャンルの一定のレパートリーをもつとしている。また，第二言語習得の分野においては，Hall，Cheng & Carlson（2006）が，ジャンルを「ある行動を行うのに必要な記号的リソースの慣習化された型」と定義し，ジャンルの概念を用いた第二言語習得研究の可能性を示唆している。さらに，西口（2009）はジャンルについて人間の思考を可能にするもの，人間の意識を形成するものとする議論を行っている。これらを踏まえた上で，本研究ではジャンルの定義を「人間の多種多様な活動領域における言語使用が創り上げる発話の相対的に安定した諸タイプであり，ある活動領域においてわたしたちがうまく振舞うことを可能にするもの」とする。このように考えた場合，ジャンルとはある形をもった知識として提示が可能なものではなく，その人の実践への参加のしかた，振る舞いの方法に現れるものであるといえる。したがって，本研究においてはジャンルの獲得を実践への参加のしかたとしてとらえ，ある個人の共同体における実践への参加のあり方の変化をジャンルの獲得の過程と考える。

このように人間の活動領域，その活動領域における実践と分かちがたく結びついたジャンルの概念を用いて学習者の日本語習得の過程を見ることにより学習者の言葉の発達を，その人の生活の場との関係，その場における実践との関係，その人の生きる社会との関係において検討することが可能になる。また，活動領域を一つの単位とするジャンルの分析の視点によって複数の活動領域を行き来する学習者の習得の過程を明らかにすることは，文脈間の移動を焦点とする「越境のための日本語」について考えることにもつながると考える。

4. 調査の概要

現在，筆者はA工業短期大学においてフィールドワークとインタビュー，及び会話の録音による調査を行っている。調査は2009年3月から現在（2011年7月）まで実施しており，今後も継続する予定である。A工業短期大学は，主に自動車業界で活躍できる人材を育成することを目的とした大学である。卒業生はその多くが整備など自動車関連の仕事に就く。協力者CKは，2007年に来日し，2年間日本語学校で日本語を学んだあと，2009年4月にA工業短期大学に入学した。その後，この大学で2年間の課程を終え，現在は同大学の専攻科（1年）に在籍している。

本稿では，CKの大学入学から専攻科1年の前期（2009年4月～2011年7月）までの調査をもとにCKの大学における実践への参加について記述を行う。

5. 分析

5. 1. CKのコミュニティへの参加

CKは大学入学前までに，日本語学校やアルバイト先における活動に十分参加できるだけの日本語を身につけていたが，大学入学以前には車について専門的に学んだ経験はなく，この学校に特有の活動である自動車整備の実習にもこれまで参加したことはなかった。

しかし，1年生の10月（2009年）の段階では大学における重要な活動である実習の作業に他の学生と協力しながら参加できるようになっていた。大学の定期試験でもこれまで不合格になったことはなく，全ての科目で単位取得条件以上の点数をとっているという。また，卒業年次である2年の3月には国家資格である自動車整備士2級を取得している。これらのことからもCKは大学において実習を含む授業活動に参加ができるようになっていたと言える。

また，CKは1年生の後期から，MSという日本人の学生と親しくなり，2年生になってからは，通学や休み時間，昼食時も行動を共にすることが多くなっていた。MSは大学に入学する前に自動車関係の仕事をしており，現場の情報に詳しい。また2人には親しい教員が数名おり，ある教員とは日常的に昼食をともにとるようになっていた。またある別の教員の研究室を訪問し，車や日常生活についてよく話をしていた。そこには，学校というコミュニティとも異なる，仲間のコミュニティが形成されていた。CKはそこで友人MSや教師など，自動車整備関連の現場の経験者の間で交わされる車や自動車業界についてのやりとりに日常的に参加していた。また，CKはその中で慣習的に使われていることばやそのことばに対する意味づけを共有し，自分なりの解釈や意味づけを加え

ながら，そのようなやりとりに参加していた。

次の 5. 2. では，それらのことばの中の 1 つである「ミンカン」ということばに注目し，ことばとそのことばにまつわる意味づけの共有についてみていく。

5. 2. ことばとそのことばにまつわる意味づけの共有

5. 2. 1.「ミンカン」

授業における教師による挿話[2]や，仲間内でやりとりされる業界話の中には業界関係者の間で使用されてきた特別な用法や意味をもつことばが多く含まれていた。その中の 1 つが「ミンカン」ということばである。

1 年生の 10 月ごろ（2009 年 10 月）CK と MS は徐々に親しくなり，休み時間も一緒に行動することが多くなっていた。この 2 人の間では休み時間でも車に関する話題がよく取り上げられる。この日の休み時間も，オルタネーター[3]という部品をネタにした冗談や「ミンカン」での仕事などが話題になった。この場合の「ミンカン」とは自動車会社の正規ディーラー以外の整備工場を指す。「ミンカン（民間）」という言葉自体は一般的に使用される言葉であり，自動車整備に明るくない者にも馴染みのある言葉である。しかし，その「ミンカン」が整備業界において何を指すのかは不透明で，調査者自身も「ミンカン」ということばが正規ディーラーと対比させて語られてはじめて自動車業界における「ミンカン」が何をさすのか類推することができた。つまり，この場合の「ミンカン」はいわば一種の業界用語であると言える[4]。CK は，就職するならディーラーよりもいろいろな車種を扱える民間のほうがいいといい，その発話の最後に「なあ M ちゃん」と付け加えていた。

このことから CK は「ミンカン」という業界用語を，自動車業界で仕事をする人にとっての意味や位置づけとともに理解し，使用していることがわかる。また，この意味づけは少なくとも MS と共有されていることがわかる。おそらく CK は MS や教師とのやりとりの中で，「ミンカン」ということばを，その用語が業界内でもつ意味づけも含めて身につけたと考えられる。また，そのようにして自分のものとしたことばを使用することによって，MS たちとの業界話に参加することが可能になっている。つまり，車や整備業界について語ることばは，CK と MS や教師をつなぐものであり，それらのことばを使用して業界話に参加することはまさにその瞬間このコミュニティにおける実践に参加していることを意味する。

5. 2. 2. 将来を決める手がかりとしての「ミンカン」

また，このようにして身につけられたことばとそのことばにまつわる意味づけは，現在 CK が進路を決定するための重要な手がかりとなっている。下の発話は，前出 2009 年 10 月の実習から 9 ヵ月後（2010 年 7 月）の CK のインタビューでの発話である。

> 将来自分でも会社をしてみたいし，それならディーラー行ったら，おんなじメーカーの車にしかさわれないですから。A 社やったら A 社ばっかりのできるんですけど，B 社とか C 社とか入ってきたら全然できないですからね。そうするんだったら，やっぱりミンカン，という工場が一番いいんかなと思うんですけど。
>
> 【2010.07.27　CK インタビュー】

ここでも CK はディーラーに就職した場合，同じメーカーの車しか「さわれない」ので，幅広い整備技術を身につけるという点では「ミンカン」への就職のほうが有利であると話している。MS たちとのやりとりの中で身につけた業界のことばは，自動車整備業界に身をおこうとする CK にとっては，将来を選択するための重要な手がかりともなっている。

CK は大学入学当初は車について専門的に学んだ経験はなく，大学における実践への参加の経験もなかった。しかし，この時点において大学の友人や教師と，その場において慣習的に使われていることばや意味づけを共有し，さらに自分なりの解釈を加えながら，将来の選択を行うようになっ

2 授業の目的に直接関わる学習項目についての説明などからはやや外れた教師の発話。授業中の教師による脱線話などを指す。

3 エンジンなどから伝達される機械的運動エネルギーを交流の電気エネルギーへと変換する装置。

4 広田（2003）『自動車整備士になるには』でも，カーディーラーと比べ民間の整備工場では幅広い車種を扱うということが書かれている。ただし，この本においては「民間」ということばは使用されず，「自動車整備工場」ということばが用いられている。

ている。つまり，CK はこのような意味づけを通じて，自分の生きる世界を理解し，自分と周囲との関係を結び，また結び替えを行っていると言える。

5. 3. ことばとそのことばにまつわる意味の共有を可能にするもの

では，このようなことばやそのことばにまつわる意味づけはどのようにして共有されるようになったのだろうか。次にそのような意味づけの共有を可能にするものについて明らかにする。

5. 3. 1. 他者が語ることを介した意味づけの取り込み

先にも述べたように，授業の中の教師による挿話[5]や，仲間内でやりとりされる業界話の中には業界関係者の間で使用されてきた特別な用法や意味をもつことばが多く含まれていた。CK の発話には，それらのことばがその意味づけも含めて取り込まれたものと思われる発話が繰り返し現れた。例えば，5. 2. であげた「ミンカン」の事例もその１つである。

ここで注目したいのは，CK のインタビューで「ミンカン」ということばが，そのことばに対する評価が含まれた１つのストーリー[6]の中で語られていることである。もう一度先の CK の発話を見てみたい。CK の語るこのストーリーの中では，「ミンカン」がディーラーに比べ，多様な車種を扱うことができ，修理の技術を身につけるために役立つ場として語られている。限られた車種しか扱えないカーディーラーと幅広い車種を扱うことができる民間の整備工場を対比させるこのストーリーは，自動車整備士を目指す人々を対象に書かれた，広田（2003）でも紹介されており，業界において一般的に流布しているものであることがわかる。CK 自身はインタビューの中で，この話を就職指導を担当している教師からも聞いたと述べており，筆者は同様のストーリーが，MS のインタビューの中でも語られているのを確認している。つまり，このストーリーは業界関係者の間で共有され，繰り返し語られているストーリーであると言ってよいだろう。CK はこのように現場経験者の間で繰り返し語られるストーリーを介して「ミンカン」ということばとことばにまつわる意味づけを取り込んでいると考えられる。

5. 3. 2. 他者とともに何かについて語ること

次に車に対する評価について，他者とともに語ることによる意味の共有の過程を見ていきたい。

《字義的意味から生活の中での意味を持つことばへ》

１年生の終わりごろから２人は MS の運転する車で一緒に通学し，往復１時間の通学時間を共有するようになっていた。学校での休み時間にも，駐車場に止めてある MS の車の中で時間をつぶすこともよくあるという。その日も２人は午後の学校行事の開始まで車の中で時間をつぶすというので筆者もその車に同乗させてもらった。駐車場には教職員や学生の車が駐車されており，筆者の車も MS の車の向かいに駐車してあった。車窓からは自然にそれらの車が目に入る。そのような環境において話題は車に関するものが多くなっていた。以下はその際のフィールドノートの記述である。

> 車に乗ってしばらくすると，２人は向かい側に止めてあった私の車をネタに，周囲の車の査定を始めた。MS さんは，私の車はヘッドライトが黄色くなっていることや，タイヤがすりへっていることなどを指摘して，下取りは難しいだろうと言った。そこに，CK さんは「M ちゃんはタイヤ好きやけんな」と合いの手を入れる。さらに周囲に止まっている他の車についても，ナンバープレートがさびている，バンパーもいっぱいキズを塗ったあとがあるなどの点を指摘しながら，２人はこの車は 20 万ぐらい，この車は・・・というふうに下取り価格を査定していった。２人は少し前に中古車査定の授業を受けたそうで，そこで勉強した評価基準もとりいれながら査定をしているらしい。他にも，何万キロ走っているのか？などについてやりとりをしていた。途中で CK さんは，MS さんに「軽のほうが高く売れるんだろ」と確認。MS さん自身現在軽自

5 授業の目的に直接関わる学習項目についての説明などからはやや外れた教師の発話。授業中の教師による脱線話などを指す。

6 Labov（1972）は，Orientation（方向付け），complication（一連の出来事），evaluation（出来事の評価），resolution（出来事の結末部），code（話の終結部）をナラティヴの構成要素としている。CK の発話はこれらの要素を含んでいる。したがって１つのストーリーとみなすことができる。

動車にのっており，燃費や自動車税，下取り価格などの点から判断して軽にしたそうだ。また「査定」の間にCKさんは「アウディのA4ってなに？ 18Tってなに？」などの質問をMSさんにしていた。また，同級生が駐車場にやってきて自分の車に乗るたびにその車を評価し，自分はどんな車がほしいなどといったことを話していた。

【2010.06.25FN】

CKはこの時期，自分の車を買いたいと考えており，2人のやりとりの中ではその候補にあがる車のことがよく話題にのぼっていた。この時も2人は自分が買うならどんな車がよいかということをたびたび口にしており，このやりとりもそのような流れの中で現れたものである。

さて，上記のやりとりにおいて，やりとりが成立し，2人の間で車の下取り価格の評価が一致するには，中古車査定に関することばを知っていることに加え，2人が中古車に対する評価項目や評価の基準を共有していることが前提となる。2人の評価の一致を可能にするものの一つが中古車査定の授業で提示された評価基準である。その授業で2人は中古車の査定のチェックのポイントとなる項目を学んだという。中古車査定基準は業界内で中古車価格を安定させるための基準であり，それゆえその基準は業界内で広く共有されなければならないものである。このように自動車業界で共有された車に対する評価基準を参照しながら車の価値について語ることが，2人の間で下取り価格を一致させ，このやりとり自体を成立させるものとなっている。また，その中で使用されることばは，2人にとって意味のある重要なリソースとなっている。

しかし，この中古車査定の基準も教科書で学んだ段階では，単なる評価基準のチェックリスト，あるいは中古車査定用語のリストの字義的意味の理解にとどまっていた可能性は高い。それまで中古車査定について学んだり，車を売ったり買ったりした経験のないCKにとっては特にその可能性は大きい。つまり，それらのことばがMSとともに自分が買いたい車について語るという文脈において語られることによってはじめて，2人の間のやりとりにおける重要なリソース，言い換えれば生活の中で意味を持つことばへと変化しているのである。この変化は他者がいてはじめて可能になることである。また，その他者とともに何かについて語ることが中古車査定リストの字義的意味をCKの生活の中で意味を持つことばへと変えていると言える。

《他者とのやりとりのすりあわせ》

次にCKとMSの間のすりあわせによる意味づけの共有の過程を見ていきたい。

2人の間では下取り価格や燃費のよさ，車の維持費の安さなどが，購入する車の評価基準として共有されている。先の駐車場のやりとりではMSが燃費や自動車税，下取り価格などの点から軽自動車を高く評価する発言を行っているが，この駐車場以外でも2人が車を評価する際に，たびたび燃費や維持費など車の経済性について言及していることが確認されている。

CK：パッソこの車やなあ。
MS：ほうじゃ。
CK：軽4でえ，これ
MS：普通車じゃと言よんでえ。
CK：これも普通車なん。
MS：ほうじゃ。
CK：これが燃費がええらしいよ。

【2010.11.16 車内会話録音】

しかし，前出の中古車価格の査定基準が業界内で共有されるべきものであるのに対し，燃費のよさや車の維持費といった車の購入基準は必ずしも広く共有されたものとは言えない。購入の基準はあくまでも個人の嗜好であって，その嗜好が広く共有される必要はないからである。例えば，この学校には「車好き」が多く，車の購入やカスタマイズにお金をかける学生も多いという。このような学生にとってみれば，燃費や維持費といった車の経済性よりも外観や走行性能のほうが重要となるだろう。つまり，車の経済性を重視する2人の価値づけは，必ずしも業界全体，あるいは大学の学生の間で広く共有されているものではなく，2人の間でのみ共有されたものである可能性も高い。

先に述べたように，このような車に対する評価を含んだやりとりは，2人のやりとりの中に繰り返し現れるパターンとして他の場面でもたびたび観察されている。車に対する評価の共有は，2人の間で繰り返されるやりとりにおいて，価値観の交換が行われる中で生じたものと考えられる。言い換えれば，このように2人の間で車について繰り返し語る中で，やりとりのある傾向が現れる，い

わばやりとりのパターンのすりあわせ[7]が起こっているのである。

また，学校の駐車場では，他の学生が車を乗り降りするたびに2人の間でその学生の車やその学生自身に対し，評価的なやりとりが行われていた。特に2人のやりとりの中で繰り返し話題にのぼる学生についてはあだ名がつけられ，第三者には話題の人物が特定できないよう暗号化されていた。2人の間ではこれらの学生に対する評価も共有されており，これもまた2人の間で特定の人物について評価を含んだやりとりを繰り返す中で，お互いのやりとりのすりあわせが起こっていることを示すものと考えられる。

他者と時間と空間を共有し，語り，その中で新たなやりとりのパターンが生まれていくこと，またそのパターンが繰り返されること，これも2人の間で意味の共有に大きな役割を果たしていると考えられる。

6. まとめ

本稿では，CKのA工業短期大学における実践への参加について記述を行った。

入学当時，車に関する専門的な知識もなく，また実習という活動への参加の経験もなかったCKは，入学2年目の7月（2010年7月）には実習作業および作業中のやりとり，またMSという親しい友人や教師とのやりとりに参加が可能になっていた。

教師の説明に現れる挿話や，CKとMSの休み時間のやりとりには，現場にかかわる情報がふんだんに含まれていた。これらのことばは現場を経てこの学校にやってきたMSや教師たちとともに活動し，やりとりを行う中で身につけることができたものである。

またこのように車や整備業界について語ることやそのためのことばは，CKがMSや教師の間で繰り広げられる現場関係者の業界話に参加するための重要なリソースとなっている。つまり，MSや教師を介して身につけたこれらのことばは，さらにMSたち現場経験者とつながることを可能にするものであると言える。

さらに，CKは大学の友人や教師とその場において慣習的に使われていることばやそのことばにまつわる意味づけを共有し，さらに自分なりの解釈や意味づけを加えながら，自らの選択を行うようになっている。つまり，CKはこのような意味づけを通じて，自分の生きる世界を解釈し，自分と周囲との関係を結び，また結び替えを行っているのである。

ここまで見てきた，ことばとそのことばにまつわる意味づけの共有を可能にしたのは，《他者が語ることを介した意味づけの取り込み》と《他者とともに何かについて語る》ことによるものであった。また，《他者とともに何かについて語る》中で《字義的意味から生活の中で意味あることばへの変化》が起こり，《他者と語ることによるすりあわせ》が生じていた。これらもまた，ことばやその意味づけの共有に重要な役割を果たしている。

CKは現場経験者である他者の視点から語られたストーリーを介して，その経験者の視点を取り込み，自分の生きる世界を理解していた。また，CKは他者とともに何かについて語ることで，そのことばを生活の中で意味のあるものへと変化させていた。さらに，CKは親しい友人とある物や人に対する評価を含んだやりとりを日常的に行っていた。そのような価値観の交換が繰り返しなされる中で2人の間でのやりとりに特定の傾向やパターンが生じる《他者と語ることによるすりあわせ》が生じていた。

これらは全て他者の存在があってはじめて成立するものである。バフチン（1952-1953/1988）は，対話理論の中で，あらゆる発話が常にだれかに向けて発せられるものであり，言語コミュニケーションの一連の連鎖の中に存在するものであるということを強調している。そして，その発話はそれを発する人の声ばかりでなく，その発話の向けられている他者の声も反映しているという。発話を受け取った人は，その声を取り込み，自分自身の解釈によって新たな意味を重ね，またそれを相手に向けて発する。声は他者とのそのような解釈を通じたやりとりの連鎖の中で作られ，作りかえられる。「声は社会的な環境の中でのみ存在する」（ワーチ，1991/1995）と言われるゆえんである。

7 ここでは，「すりあわせ」を，二者間でどちらかの意味づけが一方的に他方に取り込まれるということではなく，やりとりが繰り返される中で2人のやりとりの中で取り上げられる話題やその評価についてあるパターンが生まれることとする。決して二者間の価値観の一致を表すものではない。

CK が A 工業短期大学で身に付けたことばは，確かに「専門用語」あるいは「業界用語」という名で呼ぶことができるものである。しかし，これらのことばは「専門用語」「業界用語」として真空の状態の中で生まれてきたわけではない。そこにはこれらのことばを必要とする共同体があり，その共同体を支える実践がある。ことばのジャンルはその中で長い時間をかけて培われてきたものであり，共同体が共同体として存続することを支えるものでもある。

したがって，その共同体のメンバーにとってそれらのジャンルは決して「専門用語」のような特殊なことばではなく，そのひとつひとつが生活になくてはならないものである。そして，そのような生活において意味のあることばは，他者との絶え間ないやりとりの中で生まれていく。決して，「専門用語」のように社会の環境から切り離された語彙項目のリストではないのである。

また，ことばのジャンルを仲間と共有し共同体における実践に参加するということは，その場で生き，その場において自分の位置を占めるということである。それを可能にするのが，他者とともに時間と空間を共有し，その中で解釈を通じたやりとりを続けていくことである。他者とのやり取りの積み重ね，それは，学習者が自分の生きる場所を確保し，越境し，さらに生活の場を広げることを可能にするものといえるだろう。

今後も，学習者が日本において自分の生きる場所をどのように確保し，どのように広げていくのか，またそれを可能にするものが何なのかをジャンルという概念を通して見ていきたい。

文献

大平幸（2010）. 日本語学習者における複数のジャンルの獲得 ── 複言語・複文化主義の視点から見えてくるもの．細川英雄, 西山教行（編）『複言語・複文化とはなにか ── ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』(pp. 93-106）くろしお出版.

菊岡由夏，神吉宇一（2010）．就労現場の言語活動を通した第二言語習得過程の研究 ──「一次的ことばと二次的ことば」の観点による言語発達の限界と可能性『日本語教育』146, 129-142. .

西口光一（2009）．接触場面における複言語話者の心理と発話『多文化社会と留学生交流』13，1-14.

春原憲一郎（2006）．専門日本語教育の可能性 ── 多文化社会における専門日本語の役割『専門日本語教育研究』8，13-18.

バフチン，M.（1988）．新谷啓三郎，佐々木寛，伊藤一郎（訳）『ことば　対話　テキスト』新時代．（Bakhtin, M. M. (1952-1953). 原題ロシア語.）

広田民郎（2003）．『自動車整備士になるには』ぺりかん社.

ワーチ，J. V.（1995）．田島信元，佐藤公治，茂呂雄二，上村佳世子（訳）『心の声 ── 媒介された行為への社会文化的アプローチ』福村出版．（Wertsch, J. V. (1991). *Voices of the mind: A sociocultural approach to mediated action*. Cambridge, Mass: Harvard University Press.）

Hall, J. K., Cheng, A., & Carlson, M. T. (2006). Reconceptualizing multicompetence as a theory of language knowledge. *Applied Linguistics, 27*, 220-240.

Labov, W. (1972). *Sociolinguistic patterns*. Philadelphia: University of Pennsylvania Press.

（2011 年 10 月 26 日受理）